



さくら通信



Hoju
Group
宝樹会

No.7

2018

宝樹会によるウィーン発の浄土真宗会報誌

道を求めるころ (4)

雪山童子の求道

岡本英夫

次に、座より立ち上がります。それまでの童子の求め方、求道のあり方というのは、坐っていたわけです。坐っている時に、羅刹の言葉が発せられ、それが耳に入ってきた。「坐る」と「立つ」はこの場合大違いなのです。坐っているということは、求めはしているのですが、その求め方は、立って自分の足で尋ね歩くというような積極性はない。その積極性の違いを、坐ってじっとしていることと、立って求めて行くことと、この二つではっきりと分けて表すのです。ですから、もしここで童子が坐ったままでしたら、あるいは、後の半偈は聞くことができなかつたかもしれません。

自分で立ち上がり、手をもって髪を挙げる。この表現は何を意味しているか。髪が前にあると向こうは見えません。見えない状態で辺りを向いても、はっきりものが確認できない。だから邪魔な髪を自分で挙げたのです。髪は自分のものでしょう。自分自身のいろいろなものが自分にさらに次なるものを求めていこうという時の邪魔をするわけです。ではどうするか。自分の手で障碍(しょうがい)を取り除き超えていこうとするわけです。誰かが来てやってくれるのを待つのではない。

そして、四方を振り返る。辺りを見る。即ち探し求めていくのです。尋ねまわらなければならない。出会った一つのものですぐ満足しては



木のもとのお話(7)

浄土真宗

「浄土」とは私たちみんなが立っているところ、この「浄土」の上に私たちが立っているのです。私の人生の立脚地なのです。今、生きている私たちが立って生きている大地です。

「真宗」の「真」は、まこと、いつわりのない、ほんものということです。「宗」は「中心」、「むね」です。ですから「真宗」は「むねの教え」「真実の教え」です。

注1) 諸仏 ……とは?

仏法の道を歩み、その真実であることを証明している人

いけない。「四方」というところに、ひたすら謙虚に尋ね求める姿が出ているように思います。

しかし、いたのは唯、羅刹だけだったのです。ここが一つのポイントだと思いますね。誰もいないわけではない。一人、この羅刹、鬼がいるだけなのです。その羅刹の姿を見た時に、童子の心の中にどのような思いが起こったか。それはすぐに想像がつくと思います。

「童子はさらに言った。「誰がこの救いの教えを説いたのか。誰が仏のような声で辺りを響かせたのか。」しかしいくら探しても誰もいず、やはり羅刹の姿を見るだけであった。童子は疑った。「はたしてこの羅刹があのような偈を説くであろうか。あの偈は人が聞けば、あらゆる恐怖や、醜さをたちまちのうちに除くことができるほどのものである。ところが羅刹の顔といえばその逆の、甚だ、畏怖すべきものであって、とてもあのような素晴らしい偈を説く者とは思えない。」」

今の半偈を聞けば、どんなに人生に恐怖を感じて苦しんでいる人も、その恐怖が除かれてゆくような素晴らしい教えであると。ところが、今、目の前にいる羅刹の顔、形、姿というものは、まったくその逆であり、甚だ畏怖すべき恐るべきものである。とてもこのような素晴らしい偈を説く者とは思えない。そういう疑いがまず起ったわけです。これはよく分かります。

さて、そこで童子はどうするか、というのがこのお話の非常に大きなポイントのところだと思います。

「一旦は、こう考えたものの、童子はもう一度考え直した。「しかし、私は何も知らない者だ。この羅刹は、あるいは過去の諸仏（注1）に会い、諸仏からよくこの半偈を聞くことができていたのかもしれない。もしそうであれば…。よし、羅刹に問うてみよう。」」

童子は、前に進んで羅刹のところに至って問うのです。一旦は疑ったけれどももう一度考え直すという展開です。

はじめ童子は疑います。まさかこの羅刹が、というわけですね。しかし、もう一度考え直すのです。経典の叙述では、一旦はこう考えた、しかしもう一度考え直したと、さっと展開をしてゆきますが、私達の現実には、なかなかさっとはいかない。長い間執拗に私に迫ってくる。その問題から逃げたいとばかり思い、それが自分に大事なことを教えているとは思えない。それがだんだんと、時間をかけて、自分のどこかでずっと考え続けていって、遂にその問題を受け入れてゆこうとなれば、ガラッと変わってることがあります。時間がかかるような問題だと思います。

童子ももう一度考え直したのです。それは二つの面で考え直しました。一つは、自分自身です。私とは実はどういう者であるかと翻って自己を考えれば、実は真実について何も知らない者だと。これから道を求めてゆこうとしているだけであって、至るべき真実の世界については何も知らない者だと、本来の自分のところに立ち帰るのです。

もう一つは、この羅刹は顔や姿は非常に醜く恐い鬼けれども、恐い面だけを見てただ怖れているだけではないかと。彼がなぜこのような素晴らしい言葉を発することができたのか。それが問題だと。ひょっとすれば、かつて仏に出会ってこの教えを聞いたのかもしれない。それを私に言っているのかもしれないと。

(続く)

